

成果報告書

記入日 2024年 5月 8日

フリガナ (オオタ ヒヨリ) 氏名 太田 日和	渡航先国名・地域 タイ・チェンマイ	所属機関 チェンマイ大学
研究テーマ：タイにおける性的マイノリティの多様性とその受容の実態～レズビアン・トランス男性に着目して～		
研究期間：2023年 4月～2024年 4月（1年 0ヶ月）		
研究成果（概要）日本人はタイ人に性的マイノリティに寛容であるというステレオタイプを持つ。タイでの実地調査でも調査対象者のほとんどが性的少数者であることで差別を受けたことはないと回答した。この要因としてタイ人の自身の幸福を追求する価値観があると推測する。		
研究成果（詳細） 〈はじめに〉 タイはトランスジェンダーや同性愛者に寛容な国というイメージが日本ではついている。実際に先行研究から、タイにはトムボーイやゲイキング、ゲイクイーンなど多様な性の種類があり、自分の性的指向や性自認によって複数の性を自称することが分かっている。しかし、タイ人はトランスジェンダーや同性愛者を悪いものと考えており、顕著な差別が発生しないのはタイ人特有の「事なかれ主義」によるものと先行研究では言及されている。その証拠に、女性や子どもの売春問題は大きく取り上げられても、若い男性のセックスワーカーが増加しつつあることは社会問題として取り上げられていない。タイでは「女らしさ」や「男らしさ」の規範に従っている風になれば社会的な制裁を受けることはないため、タイ人のトランスジェンダーたちは公の場では社会の規範に沿って生きていると言われている。これらの先行研究には2つ問題点がある。1つ目は先行研究のほとんどが1990～2000年代に行われたものであり、本テーマに関する現状と齟齬がある可能性があることである。2つ目はタイでの同性愛者嫌悪は中流以上の階級の人々に多く、1990～2000年代のタイの学者は特権階級以上の出身がほとんどであったため、タイ人によってタイの性的マイノリティ問題が研究されていないことだ。それに加えて各ジェンダーにも研究の進度に違いがあり、1956年から1994年の間に出版されたLGBTに関する書籍や論文では、76パーセントを男性の同性愛、19パーセントがカトウイの研究で女性の同性愛のみを扱っている研究は6パーセントだけであった。このことから、女性の同性愛者やトランスジェンダーの研究が圧倒的に遅いことがわかる。そのため、タイ人の性的マイノリティに関する価値観について、現地で生活を共にしながら先行研究が少ない出生時の性別が女性である性的マイノリティ(トランス男性・レズビアン)をターゲットにして研究していく。 〈タイの性的マイノリティ観について〉		

タイにおける性的マイノリティ達への差別の有無、自身の性を自認した経緯の 2 軸を中心にインタビュー調査を行った。インタビュー(対象者は 13 人の出生時の性別が女性であった性的マイノリティ達である。内訳はチェンマイ出身者が 10 人、バンコク出身者が 3 人である。このインタビューで得られた返答をもとに考察する。

① 性的マイノリティ達への差別の有無

インタビューした 13 人全員がトムボーイ(トランス男性)、レズビアンであることで差別を受けたことはないと言っていた。2023 年 12 月に行ったインタビュー調査では、性的マイノリティとして国や社会に要求したいことを強いて言えば同性婚の合法化と語る人がほとんどであった。2024 年 3 月にタイでは同性婚が合法と決定した時に話を聞くと、家を借りる時の申請がしやすくなった、病院等での付き添いがしやすくなったなど制度上での不具合が少なくなったと喜んでいる方が多かった。

地域ごとの性別観については、タイ南部は性的マイノリティに対して厳しい見方もあり次点でタイ東北部、タイ北部や中央部はタイの中でも性的マイノリティに寛容であると話していた。タイ南部が性的マイノリティに厳しい理由として、ムスリムが多い地域であることが挙げられる。タイ東北部はタイの中でも高齢者が多い地域でありその影響があると考えられる。しかし、この地域差はタイの中で比較した場合であり、どの地域でも自身の性をカミングアウトして不都合が起こることや進路に影響が起こることはないと話す。他にも両親の職業が軍人や警察だとその子どもはカミングアウトするときに圧力を感じることもあるという話もあった。しかし、これは性的マイノリティ自体ではなく、その本人が「男らしい・女らしい」の規範に沿っていないからだと推測される。

生活の中でも性的マイノリティ達の生きやすさに関心されていると感じる。大学の制服は通常の授業では着用は自由であり、学生は自身の性や好みに合わせて制服の着用や制服のスタイルを選ぶことができる。大学ではカトゥーイが女性生徒用の制服を着用していたり、トムボーイが制服ではなくトムボーイ特有のスタイル(うなじあたりのショートヘア、パンツスタイル)をしていたりした。トイレの使用は身体的特徴によってどのトイレを使うか決められており、全ての生徒がそれに従っていた。チェンマイ大学ではトランスジェンダー用のトイレがあるわけではなかった。

カトゥーイ(トランス女性)・ゲイセクシャル同士のカップルとトムボーイ(トランス男性)・レズビアン間の違いに関しては先行研究とは異なり無いと考えられる。お世話になっていたチェンマイ大学の人文学部でも知る限りでは出生時の体つきが男性である性的マイノリティと出生時の体つきが女性である性的マイノリティの割合はほぼ同じであった。当事者たちの話でも各性別の間で差を感じたことはないという回答の方や、むしろどうしてそのような考えになるのかと疑問を持つ方がほとんどだった。各性別で先行研究の量やメディア化に差があることの原因は、女性同士が手をつないでいる光景や同棲している姿は男性同士よりも友情関係に見えることから研究者たちの関心を得にくかったからだと言われている。だからといって男性同士のカップルが異質というわけではなく、タイの友人たちは時と場をわきまえていればどの性別でも仲良くしている姿は微笑ましく感じると話していた。他にも先行研究では男性同士のカップルにはバーやサウナなど出会いの場があるが、女性同士のカップルは出会いの場がないと記述されていた。しかし、現在では日常生活の中に自分以外の性的マイノリティがいることが普通であり、わざわざ出会いの場に行く必要が無い。その証拠にチェンマイにあるレズビアンバーでは、顧客のほとんどが出

会いを求める外国籍の移住者や旅行客であり、タイ国籍でチェンマイに住むレズビアン・トムボーイの利用客は少ない。

② 自身の性を自認するきっかけ

自身の性を自認したきっかけについてインタビュー調査をした。自身の性を自認した年齢は多種多様だった。幼稚園で他人と関わる中で自認した方もいれば、大学で初めて同性のパートナーができた時に自認した方もいた。しかし、その全員がトムボーイ・レズビアンを自認することに対して抵抗感はなかったと答えた。その要因として2つ挙げられる。1つ目は幼いころから親族や友人に性的マイノリティがいた影響で、2つ目はSNSやメディアの影響である。タイ人は幼いころの環境やSNSを通して性的マイノリティについて理解を深めていると推測できる。タイの教育機関ではジェンダーに関する授業は行われていない。

先行研究ではタイには13の性別があり、自身の性的指向・性自認に合わせて自身の性を選択していると言われていた。現在ではセクシュアリティとアイデンティティが入り混じっていることや一部にマジョリティの人間が含まれているものもあることから複雑化しており正確な数はわからない。タイでは著名人を中心に自身のジェンダーを変更する人もいる。性的指向が女性の女性でも男性を好きになった場合など、その1つの事象だけで無理やりカテゴライズすることは好ましいのかという議論もあり、タイにおける性別の数は不明という考え方が一般的になりつつある。

〈タイにおける“幸せ”とは〉

タイが性的マイノリティにとって自身をオープンにしやすい社会になった要因の1つとしてタイ人が共通して持つ価値観があると考えられる。その価値観は自分の幸せを追求することである。タイ人にとって最重要視されていることが「両親を大切にすること」であり、それが達成してさえいけばそれ以外に関して他人から干渉されることはない。そして、両親にとって最も子どもに求めていることはやりたいことができるか、子どもが幸せかどうかである。そのため、タイ人は自身の満足度や幸福について1番に考え、他人と比較することや他人をけなすことは少ないと聞く。先行研究では自分に関係のない問題なら介入しないという悪い意味での事なかれ主義の影響でタイにおいて性的マイノリティが受容されているように見えていたと言及されていた。しかし、現代では自身の人生における幸福や満足度に焦点を当て、他人の幸福や満足度の尺度については深く介入しないという非介入主義が主流の考え方である。タイで生活している中でも両親や目上の人に対して敬意を払い、それ以外の人とのかかわりの中では他人を尊重する場面が多く見られた。日本では性別だけでなく、体型など人と比較して満足度を得る若者が多いが、タイではそれぞれに適した生活スタイルを取っていると感じた。生活を共にする中で興味深いと感じたのは、差別という意識が無いがゆえに日本ではありえない冗談を言うことだ。顔つきが男性らしい女性に対して本当は男性ではないのか、トムボーイだったらたくさんの人から好意を寄せられるだろうといった冗談を言っていた場面があった。彼女たちの間で信頼関係があるからこそ言えることという前提でも、日本では性別に関する冗談は決して言うことができない。さらに彼女たちの中にはトムボーイ本人もおり、私は彼が心配になり不快に思っていないか尋ねた。しかし、彼は不快に感じるどころかわざわざ尋ねてきた私に驚いていた。私は性的マイノリティを尊重することを意識するあまりに、彼らに対して腫れ物に触るかのよう

留学中の生活・研究でのトピックス

留学中は、チェンマイのチェンマイ大学で語学の習得に励んだ。授業以外の時間はチェンマイ大学の人文学部内にあるミャンマーセンターの生徒たちと関わる中でタイ語やタイの生活、文化を知る機会に恵まれた。ミャンマーセンターでは、友人と他愛のない会話を楽しみながらナチュラルなタイ語とタイでの若者の物事の考え方を学ぶことができた。友人たちからは彼らの専攻科目であるミャンマー文化についても学んだ。起源が同じであるチェンマイ料理のカオソーイとミャンマー料理のカオスウェを食べ比べしたり、チェンマイにあるミャンマー系の寺の行事に参加したりした。似ているようで似ていないタイとミャンマーの文化比較は非常に興味深かった。

調査はレズビアンバーやトランス男性の集まるカフェで行った。インタビューを行っている時、別のテーブルに座っていた方に自身も当事者だからと声をかけていただくこともあり、タイ人の気さくで親切な性格に助けられた。インタビューを行い信頼関係が築くことのできた方からは別の友人を紹介していただくこともあり、人とのつながり合いが重要な本テーマを探求する楽しさを実感した。インタビュー調査の中では、弊大学がトランス女性の入学を許可することについて意見を求められることもあった。現地で直接対話することでしか得られない経験ができたことは1年間の留学に挑戦したおかげである。



↑ミャンマーセンターの教授の誕生日会
イベント日はみんなでムーガタを食べる



↑友人とタイの正月「ソクラーン」を楽しむ



↑インタビュー調査でお世話になったレズビアンバー

今後の社会貢献

松下幸之助記念志財団の助成に全面的に支えていただければ、このような充実した1年間を人生の中で体験できなかった。海外経験がほとんどなく、言語もままならないという右も左もわからないままタイでの生活をスタートさせた。語学学校で出会った多様なバックグラウンドを持つ人々と共に支え合いながら言語を学び、世界の様々なトピックについて議論する中で自分の知見を広げることができた。チェンマイ大学のミャンマー語学科では、毎日夕食を共にし休日も遊びに連れて行ってもらったことでタイの若者文化を肌で感じることができた。将来は日本企業に就職し、日本のプレゼンスを向上させたいと考えている。これは、昨年世界的に話題になった福島第一原発事故で発生した処理水問題で心無い言葉を掛けられた経験からだ。当時は日本人としての誇りを持って引きこもってばかりいた。しかし、タイ人の教授や友人に日本の製品やサービスが世界に貢献しているか教えてもらったことで持ち直すことができた。この経験から私が日本の製品やサービスから元気もらった恩を、日本のプレゼンスを向上させ未来の海外生活に挑戦する日本人を後押しすることで返していきたいと考える。